

平成 28 年度 各種調査結果等を活用した学力保障の取組事例

事務所名	県南教育事務所	学校名	奥州市立前沢中学校	TEL	0197-56-3005
------	---------	-----	-----------	-----	--------------

いわての授業づくりの視点に基づいた授業改善の取組

【今年度の目標】

○ 各教科の目標

国 語	「話すこと・聞くこと」の正答率を県平均に引き上げる。 「書くこと」の正答率を県比90以上に引き上げる。
社 会	歴史的分野の問題の正答率において県を上回る。（100→102を目指す）
数 学	基本計算テストを行い、全員が70%以上できるように取り組む→昨年度からの継続
理 科	基本的実験操作を習得すると共に、結果に基づいて科学的用語を用いた言語表現ができる生徒の育成 実験操作に関する問題の正答率80%以上を目指す。
英 語	「聞くこと」「読むこと」の正答率において、県を上回るようにする。

- 県学調の質問紙において、各教科の「授業の内容はよくわかりますか。」の1番「よく分かる」の回答の数値が県を上回るようにする。

【組織的な対応を図るうえで工夫した点】

- 1 平成27年度調査結果活用レポートにおける各教科の目標の修正と変更を行った。
- 2 生徒がわかる、できるようになる授業作りを目指した授業改善
「いわての授業づくりの3つの視点」に基づいた授業改善を目指し、全教員で実践を行った。
- 3 生徒が学習に打ち込める環境作りの工夫
学習意欲を妨げる具体的要因を排除するために、教務部、指導部と連携した取組を行った。

【具体的な取組】

1 教科の新たな取組指標の構築

平成27年度の調査結果活用レポートの目標を、より具体的な学力向上に結びつく目標にするため、以下の手順で実態把握シートを使い、修正及び変更を行った。

手順① 各教科部会ごとに前年度の諸調査の結果分析<シート(1)>

手順② 新たな取組目標の設定
<シート(2)～(4)>

手順③ 目標変更に伴い具体的な取組の手立ての見直し
→例(理科)：基本操作を習得させるための実技テストや小テストを実施する。

<本校生徒の実態把握シート>

県学力調査の分析について		教科名< 理科 >
(1) 平成27年度岩手県学調の分布状況		
分析の観点	分析の結果	総合
①グラフ 分布・形状	得点分布のグラフを見ると、中間層が多くを占めている。	実験器具の使い方や資料の読み取りが苦手な傾向が見られる。授業で観察や実験を多く取り入れてはいるが、学習内容の定着が十分でない部分がある。今後は観察実験を引き続き行っていくと共に、結果を考察やまとめにつながる課程を充実させ、学習内容の定着を図る必要がある。
②平均正答率	学年 58.5 県 55.8 県比 105	
③中央値		
④質問紙結果と 関連している こと	観察や実験を多く行っているため理科の授業を楽しんでいる生徒が多く見られる。	
(2) 本校生徒の正答率が低い領域・分野		
身の回りの物質(科学分野)		
(3) 授業改善に結び付けたいところ		
<ul style="list-style-type: none"> ・実験結果を考察やまとめにつなげ、思考力の向上と学習内容の定着を図る。 ・観察や実験で行ったことをイメージとして残し、学習内容の定着を図る。 		
(4) (3) を基にした平成28年度の取組目標を設定してください。		
<ul style="list-style-type: none"> ・基本的実験操作を習得すると共に、結果に基づいて科学的用語を用いた言語表現ができる生徒の育成。 ・数値目標：実験操作に関する問題の正答率80%以上を目指す。 		

2 授業改善への取組

(1) 「いわての授業づくり3つの視点」の特に学習の見通しと振り返りの2つの視点を重視

学力保障の取組の柱として、生徒がわかる授業、できる授業のための授業改善に取り組んだ。授業力の基礎基本ともいえる「いわての授業づくり3つの視点」の共通理解と実践の研究に努め、全職員の授業力向上を目指すために、以下の項目を、今年度第1回の校内研究会において確認した。

<確認事項>

- ① 「いわての授業づくり3つの視点」の中の、「**学習の見通し**」と「**学習の振り返り**」を重視した授業づくりを目指す。
※2つの視点を重視する理由……学びの目的や方向性を明確にもたせ、自己の学びの変容を実感できる授業を大切にすることにより、「わかる授業、できる授業」につながるものと考えたため。
- ② 授業研究会でもこの2つの視点を中心とした協議を行い、授業力向上を目指す。
- ③ 各教科部会でも学期ごとに、この2つの視点をもとに振り返りを行う。
- ④ 2つの視点に基づいて実践を行った結果が数値に表れるかどうかを生徒アンケート及び、学調などの諸調査の結果から検証する。

(2) 授業参観カードを活用した研究会

年間3回実施した校内研究会において、「いわての授業づくり3つの視点」をベースとした10の視点を盛り込んだ授業参観カードに感想等を記入し、教科間の交流、意見交換を目的とした4、5人の複数教科のグループ編成によるワークショップ型の研究会を行った。グループ協議の際には、授業参観カードを使用しながら授業の視点が達成できたどうかの点を討議し、授業者及び教員全体の授業改善につながっていく研究会作りを目指した。

<研究協議の柱>
「学習の見通し」と「学習の振り返り」の2つの視点を中心に、毎回授業参観カードを用いて研究協議を行う。



- 協議1 学習の見通しをもっているか。**
- ・明確な学習課題の提示
 - ・課題解決に向けて生徒が学習活動の流れを把握できたか。
- 協議2 学習の振り返りで、学びを実感できているか。**
- ・振り返りの手法
 - ・振り返るタイミング
 - ・本時の学習内容が生徒に定着していたか。
- 協議3 授業参観カードの10の視点から見た授業の改善点など**

<授業参観カード>

視点1 学習の見通し (学習課題の明示)		評価			
		A	B	C	D
1	学習課題の設定は、生徒の興味関心につながる適切なものであったか。				
2	学習課題の解決に向けての手立て、学習活動が明確に生徒に提示されたか。				
視点2 学習課題を解決するための学習活動		評価			
		A	B	C	D
3	学習課題を解決するための手立てが効果的に組まれていたか。				
4	教師の説明は長すぎず、要点をおさえたものであったか。				
5	教師の発問は適切で、かつ生徒の反応を十分に引き出すものであったか。				
6	課題解決にせまるための学び合い、グループ学習の取り入れは適切であったか。				
7	板書は見やすく、授業の流れがわかるものであったか。				
8	机間巡視は適切であったか。				
視点3 学習の振り返り		評価			
		A	B	C	D
9	学習課題の解決、あるいは学習を振り返る活動が行われたか。				
10	生徒が本時の学習の成果を自分の言葉で説明したり、評価問題を解けるようになるなど、達成感が持てる場面が工夫されていたか。				

<全3回の研究会の様子>出された意見(・)、確認したこと(➡)

ア 協議1 「学習の見通しをもっているか。」について

- ・パワーポイントを使ったテンポの良い復習から、生徒の課題意識を高め、本時の課題設定につながっていたのは効果的であった。<第1回理科>
- ・前時のはんだ付けの復習から、生徒から本時の課題を引き出す流れが良かった。<第2回技術>
- ・前時の生徒の振り返りをもとに、本時の学習課題につなげていったのが良かった。<第3回社会>
- ➡ 「明確な学習課題の提示とは？」という点について協議するグループが多く、最初の研究会から、前時の復習や生徒の振り返りをもとに、本時の課題を生徒から引き出していくことが効果的であるという意見が多く出た。

イ 協議2 「学習の振り返りで、学びを実感できているか。」について

- ・授業内容を振り返るような問題を組み入れた学習シートが良かった。
- ・生徒が大切なキーワードを使って学習活動の結果について発表していた。これからも既習を意識した振り返りを大切にしていきたい。
- ・分かったことだけでなく、そこから考えたことも振り返る必要があるのではないか。
- ➡研究会を重ねるごとに、既習事項を生かした振り返りや、生徒の考えを大切にした振り返りが学習内容の定着、学びを実感するという点において効果的であるということが明らかになった。

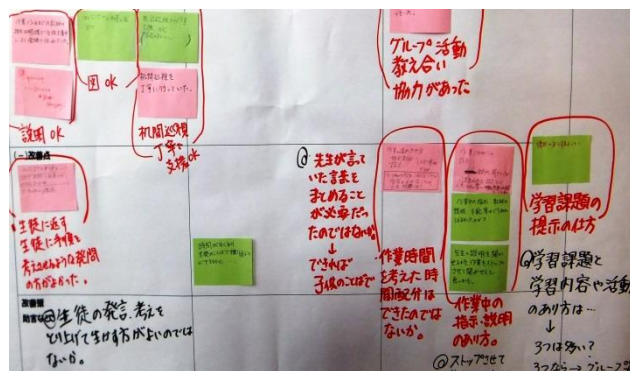
ウ 協議3 「授業参観カードの10の視点からの授業の改善点など」について

- ・学び合いやグループ学習がより主体的なものになるために、個々の課題解決の時間を大切にすることがあるのではないか。
- ・生徒のノートや学力保障を支えるために、課題設定までの様子、追究した内容など、授業の流れが一目で分かるような板書を大切にしていきたい。
- ・指導者が学習の見通しと振り返りをしっかりイメージすることにより、課題を解決するための学習活動がより明確に見えてくるのではないかな。
- ➡見通しと振り返りを意識して授業を行うことは、途中の学習活動の充実につながるという意見が最後の研究会で出されるなど、共通の視点をもとにした研究協議の成果が、先生方の授業改善への意識につながってきている。

<研究会後の教師の感想>

- ・視点をはっきりと示したことで授業者も参観者も一貫した協議を行うことができた。
- ・教科の枠を超えて共通の視点を持ち、協議することができた。回を経る毎に授業改善への意識も研究内容も深まってきていると思う。
- ・見通しと振り返りを意識することで、授業の内容に強弱（メリハリ）をつけやすくなることを痛感し、「教えたはずなのにわかっていなかった」ことが減ってきたように思う。

<ワークショップで話合われた内容の一部>



3 生徒の学習に取り組む意識の向上等をめざす取組

○前中タイム

学力保障を意図した組織的な対応の取組として指導部と連携した実践例である。

- ・フレンドシップタイム・・・学期ごとに2回（3学期は1回）、特別活動の時間を利用して行う構成的グループエンカウンターに基づいた学級集団作りの活動である。お互いの良さを認め合うエクササイズを行うことにより、安心して学び合える仲間作り、学級集団への所属感向上を目指している。
- ・STトークタイム・・・生徒と教師が1対1で10～15分程度の教育相談を行う。学級内のQUにおける要支援群の生徒への支援を目的として行う。担任、担任外を問わず、生徒が希望する教師との相談を行うことができる。STトークタイムは、毎週月曜日の6校時に行う全校一斉の取組である。年間を通して、STトークタイムを中心に組んでいるが、その週でSTトークタイムの該当しない生徒は体力向上を目的として全校トレーニングに参加している。

【今年度の目標における成果】

成果① 各教科の目標達成状況

<2年県学調の結果から>

国語	「話すこと・聞くこと」の正答率が4.9ポイント下回ったが、「書くこと」の正答率が1ポイント上回った。
社会	歴史的分野の正答率が県を1.4ポイント上回った。
数学	数と式、資料の活用、数学的な考え方で県を下回ったが、他の領域は上回った。基本計算テストは現在も継続中である。
理科	全領域において、県を上回った。「観察、実験の技能」の分野の問題で県を8ポイント上回った。
英語	「聞くこと」の正答率は2ポイント上回ったが、「読むこと」の正答率は0.7ポイント下回った。

○各教科の目標において、概ね達成出来ている。特に理科は全領域の正答率が県を上回った。これは『基本的実験操作の習得』『実験操作に関する問題の正答率80%以上を目指す』という目標のもと、目的意識を大切にされた観察・実験、既習を振り返る実技テストや小テストの継続の成果だと思われる。

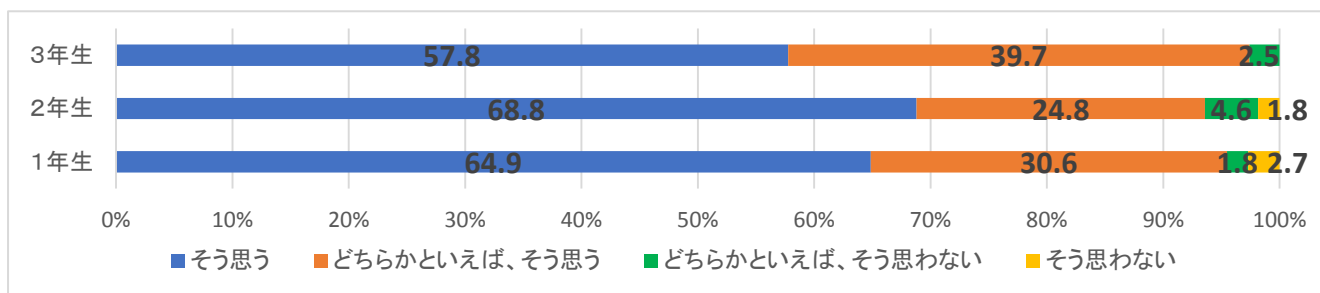
成果② 2年県学調の質問紙において、各教科の「授業の内容はよく分かりますか。」の1番「よく分かる」の肯定的回答の数値を県と比較

国語(+15) 社会(+20) 英語(+8) 理科(-5) 数学(-4)

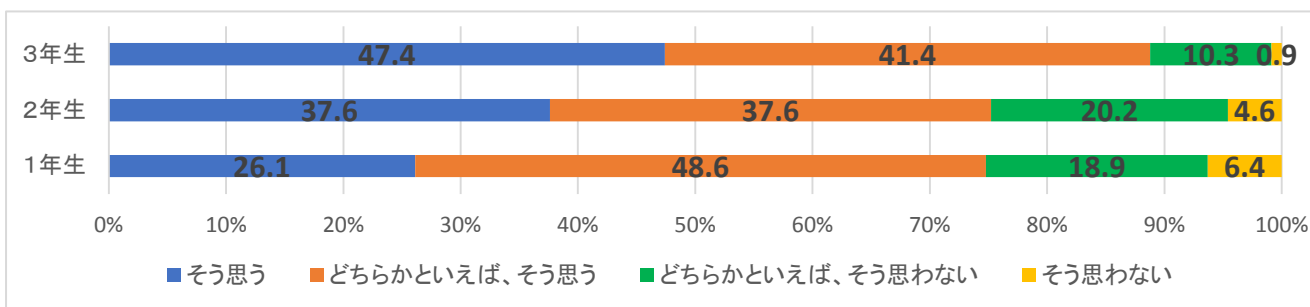
○理科においては、2番の「どちらかといえば分かる」の肯定的回答も含めると、県を1ポイント上回っている。また、数学においては2番の回答を含めても-12ポイントという結果であるが、「数学の勉強は好きですか。」の質問に対しての1番、2番の肯定的回答の数値の合計が、県に対して-1ポイントと迫っている。引き続き、分かる授業づくりを継続していくことが重要であると考え。

成果③ 「いわての授業づくり3つの視点」をもとにした授業改善の取組の成果

(13) 普段の授業で、目標(めあて、ねらい)が示されていると思いますか。



(14) 普段の授業で、最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていると思いますか。



○生活・学習に関するアンケート(10月に研究部で実施)の抽出項目から、今年度「いわての授業づくり3つの視点」に基づいた授業改善、特に学習の見通しと振り返りを重視した実践の成果が各学年の数値に表れている。

成果④ 「生徒の学習に取り組む意識の向上等」にかかわる項目の積極的回答の数値を県と比較

- a 学校に行くのは楽しい ⇒ 58% (県比+10)
- b 自分にはよいところがある ⇒ 37% (+13)
- c 人の気持ちがわかる人間になりたい ⇒ 83% (+9)
- d 先生やまわりの人は、よいところを認めてくれている ⇒ 44% (+17)
- e 人が困っているときは、進んで助けようと思う ⇒ 69% (+11)

○グループ学習においても、男女関係なく話し合いがスムーズに始まり、また気兼ねなく意見を出し合うなど、話し合いが成立する状況が学年が上がるごとに高くなっているのを感じる。これらは、前中タイムのSTトークタイムを中心とした教師と生徒とのつながり、またフレンドシップタイムなどで培った生徒同士のつながりや信頼が、学習に取り組む意識の向上に結びついていると思われる。